

第3回 センサーが切り拓く「一人ひとりに寄り添う」介護の新時代

■前世代の介護「画一的ケア」からの転換

介護現場では長らく「画一的なケア」が主流でした。決まった時刻に全員を起こし、同じタイミングで食事を与える——このような施設主導のスケジュール管理が中心だったため、入居者個々の生活リズムや体調に十分に寄り添うことが難しい場面も多く見受けられました。まだ眠っていたい時間に起こされたり、体調が

整っていないのに決められたケアが入ったりすることは、入居者にとって大きな負担となり、ストレスや満足の低下を招く可能性が指摘されています。こうした背景から、今、介護現場ではテクノロジーを活用した「オーダーメイドケア」への移行が求められています。

■一人ひとりに寄り添うケアの実現——砧ホームの取り組み

社会福祉法人友愛十字会

(東京都世田谷区)は、入居者一人ひとりの状態に応じた個別最適なケアの実現を目指しています。同法人の砧ホームでは、かつては職員が部屋順に声をかけて起床を促す、いわば職員主導のケアが行われていました。実際、入居者の3人に1人は職員に朝起こされている状況だったといえます。職員は「利用者の睡眠を守る」として、入居者の権利

を尊重することに他ならない」と考えるようになりました。



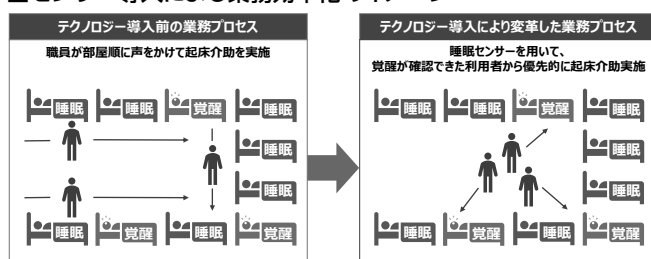
そこで砧ホームは、入居者が自身のタイミングで気持ちよく起きることができるようケアを目指しました。砧ホームが着目したのは、睡眠センサーの活用です。利用者の覚醒をセンサーで検知し、目覚めた人から順に起床を促すことで、入居者が気持ちよく起き、活動量も増えるのではないかと、そのように仮説を立てたのです。

しかし、市場には多くの睡眠センサーが存在し、各機器の特徴を把握するのは容易ではありませんでした。そこで砧ホームでは、「利用者の覚醒を検知し、職員

がスムーズに起床介助を行う」という理想の姿を実現するためにセンサーに必要な機能を整理しました。具体的には、「覚醒タイミングを正確に検知できること」「その情報がインカムを通じてリアルタイムで職員に伝達できること」という要件を満たす機器をリストアップし、2種類に絞り込みました。そして、ベンダーからの説明や2週間のトライアルを経て、最適な機種

AIでオーダーメイドケア加速に期待

■センサー導入による業務効率化のイメージ



〔全国老協版介護ICT実証モデル事業報告書(公益社団法人全国老人福祉施設協議会)〕に基づき日本総研作成

を選定しました。

導入から2ヵ月後、センサーで覚醒が確認できた利用者から優先的に起床介助を行うことで、90%以上の利用者が自分のリズムで自然に目覚めるようになりました(図表)。また、朝食時の水分摂取量も増加するなど、活動量の大幅な向上が見られています。

さらに、夜間の排泄介助業務も大きく変革しました。以前は、排泄パターン表に基づき定時で対応していましたが、センサーで入居者の覚醒を把握できるようになったことで、目覚めている入居者から優先的に排泄介助を行えるようになりました。その結果、夜間の睡眠時間が増加し、生活の質の向上にもつながっています。

このような個々の入居者に最適化されたオーダーメイドケアの実践は、介護職員に「専門職」としての自信と誇りをもたらしめています。元施設長の鈴木健太氏は、「テクノロジーを活用

することで、眠っている利用者を起こすための起床介助から、起きている利用者の活動を広げる支援へと、介護そのものが根本から変わった」と語ります。

■データ・AIがもたらすオーダーメイドケアの実現 今後も、個別最適ケアの実現を支えるテクノロジーの進化に期待が寄せられています。特に注目すべきは、近年飛躍的に機能が向上しているAI(人工知能)を基盤としたソリューションです。すでに、各種センサーから得られる多様なデータに基いて急変予測や長期的な状態予測を行うことができるシステムが実用化しています。

施設主導の画一的なケアから、データとAIに基づく「ひとりひとりに寄り添うオーダーメイドケア」へ。誰に、いつ、どのようなケアが必要か——データ駆動型のテクノロジーが、これからの介護現場を大きく変えていくことでしょう。

日本総合研究所 リサーチ・コンサルティング部門
高齢社会イノベーショングループ
マネジャー 城岡 秀彦

富山県出身。2016年(平28)京都大学卒業後、京都大学大学院医学研究科修士課程を修了。日本・シンガポールでの病院勤務を経て、日本総研入社。理学療法士としての経験を活かし、介護テクノロジー開発を中心とした調査研究・コンサルティングに従事。

